ゆめわらわ

夢童

菅波　茂

世界平和パートナーシップと被災地間同世代交流

5月11日。ニューヨーク在住の田島幹雄AMDA名誉顧問からうれしいメールが入った。「バンキムン国連事務総長の青年問題を最優先するとの表明を受けて、国連全体が青年問題を活発に取り上げている。担当部門として『国連平和と開発のためのスポーツ事務所（UNOSDP）』も設立されており、本部はジュネーブに、連絡事務所はニューヨークにある。AMDAとして国連総合協議資格を活かした連携をするべし」との内容だった。ちなみに、田島幹雄氏は国連開発計画に就職した初の日本人職員である。

スポーツは紛争の解決にも有意義である。2009年7月に開催されたサッカーワールドカップで優勝したスペインでは、バスク州独立運動のテロ活動も活発だったが、大会期間中に国内の雰囲気は確実に変わり、スペイン国民としての連帯感が強まった。

2010年1月に30万人以上の死者を出したハイチ大地震の際には、歴史的に敵対関係にあった隣国ドミニカ共和国から積極的に支援の手が差しのべられた。AMDAは緊急救援活動後の8月にハイチとドミニカ共和国に加えて日本の3カ国の中学生によるサッカー親善プログラムを実施。駐ドミニカ共和国の四宮大使やハイチ大使にも参加をいただき、湯浅広島県知事、仲井真沖縄県知事、石井岡山県知事そして秋葉広島市長からの平和のメッセージを届けた。日本からはFC千里中央と福山市立城北中学校、新庄村立新庄中学校から計18名の青少年が参加。初回にして大成功だった。

ハイチ復興支援サッカー親善交流で試合開始前の各国大使ら（左から2人目が四宮大使、3人目が筆者）

2011年8月には26年間に及ぶスリランカ内戦終結後に敵対関係にあったシンハラ、タミル、イスラムタミルの中学生によるサッカー親善プログラムを実施。3グループ間の相互理解を促進した。内戦終結後に発足した社会統合庁の事務次官や外務省事務次官から来年もぜひ実施してほしいと要請された。AMDAは日本政府の要請により、内戦停戦中の2003年から3グループ各地域に平等に医療チームを派遣し、内戦再燃直前の2006年まで活動を継続したことも付記しておきたい。

東日本大震災の復興支援で確信したのが「同世代交流」のすばらしさだった。広島県教育委員会の指導のもとに、岩手県被災地3校の高校生が必要とする新学期学用品を広島県の高校生がトラックいっぱい集め、岡山で県内高校大学生らが分類整理した。昨年5月に福山誠之館高校と黒瀬高校の各生徒会代表の4名が先生と共に余震の中を大槌高校に届けた。そのお礼として今年3月に大槌高校吹奏楽部14名の生徒が、広島では黒瀬高校和太鼓部や安古市高校吹奏楽部と、岡山では就実高校吹奏楽部と合同演奏会を行った。高校生たちが企画と運営を行った。高校生たちの友情の「核融合」のエネルギーたるや想定外の感動ものだった。

今年もハイチとスリランカで中学生によるサッカー親善プログラムを予定している。同時に歯科検診や義足プロジェクト等のモニタリングといった医療活動も実施する。スリランカでは戦闘地域だった北東部を中心に、2010年から白内障の手術を続けている。

AMDAは平和を阻害する3要因として紛争、災害、そして貧困を想定している。その解決方法として、「相互扶助」を基軸とした「世界平和パートナーシップ」を、医療のみならずスポーツや宗教などと連携したプログラムとして展開したい。

（AMDAグループ代表）